



## つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 268号 2011.2.21 発行 社会政策研究所

=====

各地で即売会や展示会などを開催して、障害者理解の取り組みが地道に行われています。地方紙からイベントなどをたくさん拾ってみました。【kobi】

### 【社説】優しさは知ることから 週のはじめに考える

中日新聞 2011年2月20日

障害のある人が暮らしやすい社会にしようと、国での話し合いが正念場を迎えています。障害のない人がある人のことを知る。それが第一歩だと思います。

あるいは失われずに済んだ命だったかもしれません。

今年一月、東京のJR山手線目白駅のホームから落ち、四十二歳で亡くなった全盲の武井視良さんのことです。ホームには、目の不自由な人に危険を知らせる点字ブロックが敷かれていました。それでも武井さんは転落したのです。

#### 無知から生じる残酷さ

なぜ落ちたのかと思い、武井さんと同じ全盲の上園和隆さん(59)を伴って現場を見ました。彼は靴底でなんべんもブロックを踏み締め、突起がほとんど感じられないと指摘したのです。そして言いました。「視覚障害者にとって点字ブロックは敷設されているだけではだめなのです。きちんと機能しなくては意味がないのです」

ハッとしました。同じ社会に暮らしながら、視覚障害者の世界を知ろうともしてこなかったことに気づかされたからです。それまで点字ブロックはありふれた風景の一断片にすぎませんでした。

JR東日本は目白駅の点字ブロックを取り換え、首都圏のホームを点検し直しました。問題のありかが分かれば気配りできます。

ホームに電車が近づくと「黄色い線の内側まで」下がるようにと放送が流れます。「視覚障害者用の点字ブロックの内側まで」と流せば、見慣れた風景の中で点字ブロックが意味を帯びて浮かび上がります。小さい子も学ぶきっかけになるでしょう。

人は生来優しい存在のはずです。ただ、無邪気な子どもがそうであるように、無知や無理解や無関心がときに人を残酷な存在にしてしまうことがあるのでしょう。

#### 障害を価値に変える

今でも障害のある人の六割が差別を受けたり、偏見を感じたりしているという国の調査があります。二〇〇六年、千葉県は全国に先駆けて障害者差別をなくす条例をつくりました。そのときには八百以上の差別や偏見の事例が寄せられました。悲しい現実です。

ちょうど同じころ、障害のある人もない人も平等に暮らせる社会にしようと、国連で障害者権利条約が採択されました。日本は〇七年に署名し、今はその批准を見すえた法律づくりが正念場です。

障害のない人を物差しにしてつくられてきた社会の仕組みが、障害のある人につらい思いをさせています。それは段差だったり、点字のない書類や手話のない会議だったり。病院や施設にがんじがらめにされたりもしています。

障害のある人も、ない人と同じように学校や職場、地域で自立して活動できるよう仕組みを改め、その権利を保障しようというのが条約の考え方です。

ホームから落ちたりするのは、目や足の不自由な人よりも、酒に酔った人がはるかに多いのです。ドアや柵をつければ、障害のある人はもちろん、ますます増えるお年寄りや子ども、酔っぱらいまでみんなの安全につながります。

障害のある人にとって優しいまちづくりとは、結局みんなに優しいまちづくりなのです。だからこそ、障害のある人の世界をみんなが知ることが大事なのです。

その半面、千葉県条例づくりに携わった全盲の高梨憲司さん（62）は、障害のある人の情報発信の大切さも説いています。「障害のことを一番よく知っているのは障害のある人自身です。生活のしづらさを周りに伝え、社会づくりに貢献すべきです。それは障害をプラスの価値に転じて活躍することでもあります」

東京の中野区立中野神明小学校で、七十人近い四年生を集めて出前授業が行われました。やってきたのは、脳性まひでずっと車いす生活の尾上浩二さん（50）です。

幼いころは手と足にスリッパを履き、はって泥んこになって友だちと野球を楽しみました。小学生時代は独り養護学校（現特別支援学校）に通い、近所に友だちはいませんでした。親や先生の話し合いで通うことができた普通の中学校では、音楽室や美術室まで友だちが負ぶってくれたそうです。

#### 優しさが芽吹くとき

子どもたちの柔らかな思いがつつられた手紙が、尾上さんのもとに届きました。「将来困っている人を助ける仕事をしたい」「大きくなったら障害のことを調べてみたい」「障害のない子と野球をしたことが心に残りました」。

尾上さんは「障害があっても人との関わり合いの中で、いろいろな活動ができることが伝わって良かったです」と話しています。

国での法律づくりでは、障害のある人とない人が同じテーブルに着いています。私たちの身の回りでも障害を知り、知ってもらう営みが重みを増す時代です。

### 知事、バリアフリー「反省」 府庁で障害者体験 朝日新聞 2011年2月20日



#### 盲導犬の介助で知事室前の廊下を歩く橋下知事＝府庁

橋下知事は18日、車いすに乗ったり、盲導犬の介助を受けたりして府庁内を移動した。初めての体験に知事は「時すでに遅しかもしれないが、これまでの（福祉の）政策判断に誤りがなかったかと反省している」と述べ、今後、バリアフリー化を進める方針を示した。

橋下知事は車いすに乗り、スロープを上ったりエレベーターに乗ったりした後、知事室前の廊下をアイマスクをつけて盲導犬とともに歩いた。その後、視覚障害者の手を取り、庁舎内を歩いた。車いす体験では、上りスロープの傾斜のきつさや内外に開く扉の使いづらさを実感。盲導犬体験では「ふだん通っている場所なのに、どの位置にいるのか全く分からなかった」と語った。

この日の疑似体験は、職員が年明けに知事に「車いすやアイマスクの体験をしてほしい。それをきっかけにして、少しでもバリアフリーになれば」とメールで提案、知事が「すばらしい提案」と応じて実現した。（龍沢正之）

### 障害者ショップ“出張”/イオン綾川にぎわう

四国新聞 2011年2月20日

香川県内外の障害者施設の利用者が作った食品や日用品などを販売するブースが19日、綾川町萱原のイオン綾川ショッピングセンターに設けられ、大勢の家族連れらでにぎわっている。20日まで。

県知的福祉協会（小松守会長）が2007年に高松市の南新町商店街に開いた福祉ショップ「Pon・Poko（ポンポコ）」の出張販売版。同ショップのPRや、就労訓練を積む障害者の社会参加を促すことを目的としている。

ブースには県内18、県外6の計24施設から菓子やパン、観葉植物の鉢植え、木製の動物型パズル、一輪挿しなどが出品された。どれも割安の価格とあって、主婦らが次々とお気に入りの商品を購入していた。



### 鯉トートバッグ人気



口コミで「焼津らしい」 読売新聞 2011年2月21日  
施設利用者が丹精込めて作り、人気の鯉トートバッグ（焼津市の虹の家で）

焼津市大覚寺の知的障害者生活介護施設「虹の家」で、利用者が作る「鯉（かつお）トートバッグ」が人気を集めている。地元の呉服店がオリジナルで制作しているカツオ柄の手ぬぐいを使った焼津らしさがあふれるバッグは口コミなどで評判が広がり、生産が追いつかないほどのヒット商品となっている。

虹の家は、社会福祉法人焼津福祉会が運営する施設で、現在は19～55歳まで36人の知的障害者が通い、縫製や簡単な作業をしたり、レクリエーションを楽しんだりしている。

虹の家では、従来、雑巾や巾着などを作っており、2009年に開かれた国民文化祭の記念品として、焼津に伝わる生地「鯉縞（かつおじま）」を使った巾着を作り、好評だったことから、職員が

「焼津らしいバッグを」と鯉トートバッグを発案。縫製班の利用者や職員、ボランティアが協力して作っている。

焼津市内では、夏場になると老若男女を問わず、手ぬぐい地や浴衣地に「魚河岸」のロゴなどが入った「魚河岸シャツ」を着る市民が多く、「鯉トートバッグは、魚河岸シャツにぴったりだ」と、口コミで広がったという。昨年、県授産製品コンクールの製品部門（縫製）で県知事賞を受賞したことで知名度はいっそう高まり、現在は約170個の注文を受けているが、納品までに1か月半程度かかる状態となっている。

主にバッグの縫製などを担当する施設利用者の八木雅代さん（40）は「丁寧に縫うことを心がけている。仕事が増えてうれしい」と笑顔で話す。山梨由紀子施設長（54）は「利用者の縫製技術が認められてうれしい。単純な請負作業だと単価は低いが、鯉バッグなどの製造で利用者に支払える工賃は倍増した」と話す。

バッグは、A4サイズの書類を横に入れられる大きさで、色は白、黄、クリームの3種類。1個3000円（税込み）。問い合わせは虹の家（054・629・5712）へ。

### 障害者と地域住民 理解深める作品展 沼田で23日まで

東京新聞 2011年2月21日 群馬

昭和村川額の知的障害者入所施設「たけのこ学園」が主催する恒例の「ゆうあい作品展」が、沼田市中心商店街の大型商業ビル「グリーンベル21」五階展示ギャラリーで開かれている。二十三日まで。入場無料。

展示しているのは、絵画や手工芸品、書、陶芸品な



ど計四百二十三点。利根沼田地区のハンディのある児童・生徒や福祉作業所の通所者など計二百十人が制作した。

同学園の堤克彦園長は「年々、レベルアップする作品を多くの人に見てほしい。障害のある人たちが作品を通じて活動の様子を発信することで、地域住民との交流の輪を広げたい」と来場を呼び掛けている。（山岸隆）

## 西条の障害者施設バンドが初ライブ 新居浜

愛媛新聞 2011年2月21日



西条市知的障害者更生施設「東予学園」(同市楠)の利用者で組織するバンド「さくら」が20日、新居浜市徳常町のライブハウス「ジャンドル」で初の本格ライブを開催。大勢の観衆を前に息のあったノリノリの演奏を披露した。

音楽好きの利用者8人と職員1人で結成し5年目。福祉イベントなどで演奏してきたが、新たな活動の刺激にしようとライブを企画。ライブハウスの理解を得て、4組が出演するイベントにゲスト出演した。

まばゆい照明と、巨大なアンプから響きわたる音響。最初は緊張気味だったメンバーも、次第に自分たちの演奏に集中。「やさしさに包まれたなら」「リンゴ追分」など、4曲を練習通り元気いっぱい演奏した。

## 利用者が作詞 授産施設「共生の森」テーマ曲が完成 涌谷

河北新報 2011年2月21日



### 「唯一の星々」を作詞した後藤さん

宮城県涌谷町の心身障害者授産施設「共生の森」を利用する後藤雄一郎さん(38)＝涌谷町＝が、施設のテーマソング「唯一の星々」を作詞した。障害を前向きに捉えた詞が爽やかな印象を与えている。後藤さんは「自分の詞に曲を付けてもらうという夢がかなった」と喜んでいる。

歌は1月にあった施設の新年会で約40人の利用者が合唱して初披露した。今後も週1回のペースで練習し、地域の催しなどで歌う予定という。

施設で講師を務める打楽器奏者大野琢哉さん(36)＝同町＝が「利用者が口ずさめる歌を作ろう」と発案。後藤さんは2週間で詞を書き上げ、大野さんが曲を付けた。

後藤さんは「格好のいいフレーズよりも、利用者に出会った気持ちを素直に言葉にした。それぞれのリズムで歌ってくれたらうれしい」と話す。

大野さんは「実感がこもった、地面にしっかりと足の付いた歌詞。日々の生活がよく分かる」と感心している。

後藤さんは「負けないで」「いつまでも変わらぬ愛を」などの作曲で知られる織田哲郎さん(52)のファン。17歳ごろから織田さんの曲に合わせて、心情を織り込んだ詞を創作してきたという。

施設には2009年11月から通う。箱折り作業やキムチ店の店番をして自立を目指している。

10年4月からは大野さんの指導でピアノを特訓中。「『唯一の星々』を伴奏して、いつでも歌ってもらえるようになりたい」と目標を掲げる。

「唯一の星々」 作詞 後藤雄一郎 作曲 大野 琢哉

今日もまたドキドキワクワクの風が

僕らを包みこむ  
ありふれた話に  
声弾ませ一緒に笑いあう  
幼い心を大切に抱えながら  
時々フラフラと揺れるけど  
まっすぐひたむきに  
それぞれのリズムで道を歩き続ける  
僕らは唯一の星々  
誰も持っていない煌(きら)めきちりばめて  
互いを照らしてる

**「仕事に対するひたむきさ生かしたい」、障害者自立へ企業に“橋渡し”新事業が軌道に/  
海老名** 神奈川新聞 2011年2月20日

スケジュールなどの打ち合わせをする鈴木さん(右)と山本さん  
=海老名市国分南

障害者の自立につなげようと海老名市の女性ラーメン店主らが起こした、企業と障害者地域作業所の橋渡し事業が軌道に乗り始めた。仕事の発注量も増え、受け入れ態勢も整ってきた。地域の理解や支援の輪も広がっている。



ラーメン店を営む鈴木晶子さん(45)が本業の傍ら社長を務める会社が「ECエンターテインメント」。さまざまな業種の企業を回って仕事を受注し、作業所に発注するのが主な業務内容だ。

現在、企業20社と6カ所以上の作業所との業務委託や新規ビジネスの調整、開拓企画役を務め、営業から発注後の品質管理までを担当する。大量発注でも仕事がさばけるようにと、作業スタッフとして子育てママ約30人も登録する。

鈴木社長が障害者と関わるようになったのは、3年前にボランティアを経験してから。活動を通じて特別支援学校卒業生の就職率の低さや障害者の低賃金の実情を知った。2009年夏には店の客の一人でもあった山本准さん(31)らとともに障害者支援ボランティアグループ「EC」を設立。地域作業所に、DVDの付録詰め作業などを取り次ぐ支援を始めた。

ただ、作業所によっては商品の品質保証への意識欠如や納期が守られないことも。「このままでは障害者の自立支援が進んでいかない」(鈴木社長)と感じて、昨年4月に法人化したのが同社だ。

鈴木社長は「障害者の社会進出には、地元企業、住民が一つになって、理解を深めることが大事」と強調。その上で「障害者が持つ能力や仕事に対するひたむきな姿勢を何とか生かしたい」と話す。

20日には、海老名市中央の海老名郵便局で、障害者らの社会見学会を企画している。

鈴木社長は「見学会を通じて、障害者の社会進出への理解が深まるとともに地域交流が盛んになれば」と、企業の協力を呼び掛けている。

問い合わせはECエンターテインメント電話046(207)7339。

**県障害者の権利条例 制定向け県動く**

琉球新報 2011年2月20日

県障害者の権利条例制定を求める3万人余りの署名とともに「条例づくりの会」が作成した条例案が1月31日に県知事へ提出されたことを受けて、県の担当部も19日までに条例制定への取り組みを始めた。同会が目指していた3月までの制定は難しい見込みだが、

国内で初めて2007年に障がい者の権利条例を施行した千葉県に担当職員を派遣し、条例制定までの経緯や現状を聞き取り調査するなど他県との連携を図っている。

県内外の障がい者や福祉関係者が連帯した「県障害者の権利条例」を求める県民大会

= 1月31日、那覇市泉崎の県庁前県民広場

県福祉保健部障害保健福祉課は4日に職員2人を千葉県へ派遣。千葉県条例の制定に携わった研究会の座長や同県の担当者に聞き取りした。

同課の金城弘昌課長は「条例が県民全体に関わることやサービスの提供主体は市町村であることからそれぞれが果たす役割などの議論が必要」と話した。同課計画推進班の喜舎場健太班長は「関係者らで構成される委員会の設置や地域でのタウンミーティングなど千葉県の取り組みも参考にしながら、具体的な方向性などをまとめていきたい」と語った。

「条例づくりの会」事務局は、障がい者教育で先進的な取り組みをしている大阪を視察し、3月5日午後1時から那覇市古島の教育福祉会館で、研修会を開き、情報共有を図る。



## 波乱の15年に幕 ハートピアきつれ川でお別れ会



朝日新聞 2011年2月21日 栃木  
お別れ会では食事をしながら、参加者は思い出を語り合った=20日午後、さくら市喜連川

閉鎖が決まったさくら市喜連川の精神障害者支援施設「ハートピアきつれ川」で20日、かつての利用者やその家族、職員らによる「お別れ会」が開かれた。開業から15年、経営難や運営母体の不祥事など、相次ぐ困難に翻弄（ほんろう）された利用者や家族だったが、「ここがあって本当に良かった」と惜しむ声があがった。

この日は、今年度の活動内容や閉鎖に至るまでの経緯が報告されたあと、最後の集まりとなる食事会が開かれた。利用者とその家族、元職員など約80人が参加してテーブルを囲み、思い出話に花を咲かせた。

2000年ごろにハートピアのホテル部門で清掃担当として働いていた男性(32)は、現在は市内のスーパーで働く。「ここで学んだ接客マナーが、今の仕事につながっている」と、施設に感謝しているという。

同時期にハートピアに来た男性(66)も、施設がなくなることへの寂しさを漏らす。「1人でいるのがつらかった。ハートピアは、そんな自分の居場所になってくれた。出来るなら続いてほしい」

ハートピアに隣接するグループホームに住む男性(36)は閉鎖を知って「どこへ行けばいいのか」と混乱したという。グループホームは高根沢町の社会福祉法人が引き取ることになったが、今後への不安から、病院に近い市内のアパートへの引っ越しを決めた。男性の母親(63)は、「それでも、施設とのつながりがなくなるのは不安。運営主体が変わっても、息子が安心して戻れる施設になって欲しい」と話す。

ハートピアきつれ川は1996年、開業した。統合失調症などの精神障害を患った人たちが、温泉付きのホテルで接客係や清掃員として働き、社会復帰を目指す全国初の施設として注目された。

ホテルの裏には、内職や陶器制作などで収入を得る授産施設も併設され、住み込みや通いで働く利用者を受け入れていた。近くには、在宅の精神障害者の相談に乗る地域支援センターや、施設の退所者らが支え合って暮らすグループホームも作られた。

2001年には、日帰り温泉の利用客と宿泊客の数が、計10万人を超えた。毎年春には地域住民を招いて花見会を開くなど、利用者と地域との交流の場にもなっていた。

しかし、長期にわたって客を確保するための計画がないなど、見通しの甘さによる経営難が常につきまとった。

当初の運営母体だった全国精神障害者家族会連合会（全家連）は約10億円の負債を残して07年に自己破産。引き継いだ全国精神障害者社会復帰施設協会（全精社協）が経営を立て直そうとしたが、ホテル部門は09年に閉鎖された。事業の引き受け手を探していたが、幹部らが研究目的で受けた国からの補助金をハートピア経営に不正流用したとして逮捕・起訴され、昨年9月に有罪判決を受けた。

一時は、施設全体を県外の医療法人に売却する話が持ち上がったものの、裁判が続いていることや幹部が逮捕されて理事会が機能しなかったこともあり実現せず、3月に授産施設も閉鎖され、完全に姿を消すことになった。（矢吹孝文、浜田知宏）

### ひと：金満里さん＝自身のルーツ韓国で公演する劇団「態変」主宰者

金満里（キム・マンリ）さん（57）

毎日新聞 2011年2月21日

常に「未踏の美」を目指し創造と破壊を繰り返してきた。役者全員が重度障害者の劇団「態変（たいへん）」（大阪市）で作、演出も担う。植民地時代の朝鮮で独立運動に加わり、逃走先の日本で韓国古典芸能のプロデューサーとなった人物の生涯を描く「ファン・ウンド潜伏記」を携え、3月、彼の故郷である韓国南部・固城（コソン）とソウルで公演する。ファンは古典芸能の名手だった母・金紅珠（キムホンジュ）さん（故人）の前夫だ。「異郷・日本で人生を終えたファンの故郷に作品を戻し、彼の人間解放、独立への思いを引き継ぎたい」

3歳でポリオを患い、7歳からの10年間を施設で過ごした。障害を「克服の対象」とする世間の常識に反発。21歳で自立し、障害者解放運動に没頭したが、「論理で事の是非を言い切る違和感」が膨らんだ。「善悪を併せ持ち、割り切れない存在が人間。その混とんを障害者の身体で表現したい」と、独学で舞台表現を工夫し、30歳の時に劇団を旗揚げした。異形の者が転がり、健常者が自明視する「美」の概念を覆す舞台は当初、「挑発芝居」と称された。

ファンの生涯は4年前、母の軌跡を追う中で知った。「最前衛を掲げる私たちの表現も、先人の闘いや古典があってこそ成り立つんだと実感した」。舞台には韓国人の障害者も出演する。「韓国人と在日、そして日本人が対等な関係を作ろうとするきっかけになれば」。公演のテーマは越境だ。〈文・中村一成〉

＝大阪府生まれ。ALICE賞、飛田演劇賞大賞など受賞。問い合わせは「態変」（06・6320・0344）。

たまには太陽の子・手をつなぐ、たまにはつなぐちゃんベクトル、たまにブログたまにはチェック



大阪市天王寺区生玉前町 5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行